

平成29年度 福島大学人間発達文化学類  
スポーツ・芸術創造専攻推薦入学試験（スポーツ）

小論文

<注意事項>

- ・ 解答は指定された解答欄に記入すること。
- ・ 解答は横書きとし、字数は指定を超えないこと。
- ・ 句読点、引用符、括弧などはいずれも1字に数える。ただし、行末の句読点などは字数に含まれないものとする。
- ・ 算用数字およびアルファベットが連続する場合は、1マスに2字を入れる（1字と数える）。

【問題】

資料『「言語技術」が日本のサッカーを変える』（田嶋幸三著、2007年）を読み、設問に答えなさい。

<設問>

傍線部の考え方に対して「賛成」か「反対」か、立場を明確にした上で、どのように考えた理由を、あなたが考える具体的な事例を挙げて、1,000字以内で述べなさい。

私は、日本の若い選手たちの育成にかかわる中で、U・17（17歳以下）日本代表監督を務めた時期がありました。そのとき、こんな場面にたびたび遭遇してきました。

練習のひとつに、「ゲーム・フリーズ」という方法があります。

「ストップ！ いまのプレーを元に戻して、止まってみる」

「そのパスはつながらなかったけれど、どうしてそのつながらないパスを出したんだ？」

選手に聞きながら、ひとつひとつのプレーの意図を確認していきます。いったんゲームの進行をフリーズ、すなわち止めることで、ひとつひとつのプレーの根拠をはっきりさせていくことを目的にしています。あるいは、ミスが出たときに、その原因や理由を点検します。

では、15〜16歳の選手の場合、ゲームを止めると、次にどうすると思えますか？

黙って私の目を見る子どもが実に多いのです。その表情は、私の言おうとしている答えを探し出そうとしているようにしか見えません。自分自身で答えを探すことよりも、私の解答を求める様子がありありと見えるのです。

日本人選手に多いこうした態度は、いったいどこから生まれてくるのでしょうか？

もちろん、私の問いには、あらかじめ決められたひとつの正解があるわけではありませんが、「きみは、どういう意図でこのパスを出したのか？」さらに、どういうふうなこの局面を切り切ったのか？」と尋ねることで、本人の目的や意志や狙いを聞きたい、というのが私の気持ちなのです。

ところが、私が求めるような答えはなかなか返ってきません。ゲームがフリーズする同時に、問いかけられた選手までがフリーズしてしまいます。

ドイツに留学していたときのことです。

私は、12〜13歳の子どもたちにサッカーを教えていました。そこでは、こんな風に練習が進んでいきました。

「クラス、どうしてそこにパスしたんだ？」

私が、ゲームを止めて問いかけます。すると、

「だってペーターは足が速いんだから、そこに走るべきだから」

そんな答えが即座に返ってくるのです。

一方、ペーターはペーターで、「いや、オレはこっちにパスしてくれと言っただろ。ボールがきたら、ドリブルで仕掛けようと思っただけだ」と主張します。

そうしたやりとりが、当然のようにおこなわれるのです。1人1人のプレーにそれぞれの狙いや意図があり、自分の意図を他者に伝えようと努力する。積極的に相手とことばを交わしていこうとする姿勢を、ドイツの子どもたちに強く感じたのでした。

それではなぜ、日本の子どもたちは黙ってしまっているのでしょうか？ 監督の目を見て、指示を待っているのでしょうか？ ドイツの子どもたちと、どこが違うのでしょうか？

ミスはミスでいいのです。ミスは、必ず起こることだし、減らしていくために確認し練習するものだからです。その時は、「いやあ、僕は本当はそこにパスを出したかったんだけど、名前を呼ばれたからこっちに出したんです。だからミスになってしまったんです」というふうな。

そのようにミスの理由や原因を、ハッキリとことばで言ってくれればいいわけです。ところが、日本の子どもたちはそうした表現が苦手です。

ドイツと日本の練習風景を比べてみると、まずはつきりとした違いとして私の目に映ったのは、「自分の考えをことばにする表現力」でした。

( 中略 )

たとえば日本の子どもたちに「きみがサッカーを好きな理由は？」という質問を投げかけたとき、

「何となく」「友達がやってたから」「テレビで見たから」といった断片的なことをぼつりと答えて終わらせてしまう子どもが、多いのではないのでしょうか。

「僕はドリブルで抜くのが気持ちいいから好きです」「私は友だちみんなと一緒にプレーできるから好きです」「走るのが好きなのでサッカーが好きです」と、論理的に筋道をたてて、理由を明快に示し、自分なりの考えを話すことができる子どもが、いったいどれくらいいるのでしょうか。

「私はこう思います。その理由は……」と、筋道を追って考え、それを言語化し、表現するところから、論理的な思考は始まります。その中から、判断力や自己決定力も育っていきます。そうした判断を繰り返しおこなっていくことで、選手自身のサッカーの能力も高まるのです。

ところが日本人の場合には、ふたつの問題が壁となって立ちはだかっているように思われます。

ひとつは、自分が考えていることをことばに出して明快に表現することが身に付いていない、ということですが、

「ただなんとなく」「あいまいなまま」行動し、それで納得している。日常生活では、それで済ませてしまっているケースもたくさんあることでしょう。しかし両親に対して「べつに」とか「ビシヨ」とかで受け答えしていること自体が問題なのです。何が「べつに」なのかということや家の中でも追求していかなければなりません。そこを質問していかねば、子どもたちは自分の意志を他人に伝えることができなくなってしまうのです。いや、伝えることはおろか、意志を持つことさえできなくなり、やがてその状態で平気になってしまうのです。

ましてやサッカーにおいては、なおさら論理的な思考が求められます。なぜならサッカーは、スピーディーなゲームの最中に究極の判断を求められるチームスポーツであり、刻々と変化していく局面に対してその都度、自分の考えを明確にし、それを相手に伝えていく必要性が生じるからです。こうした姿勢や対応能力は、日本人がこれまで最も苦手にしてきた領域だといえるでしょう。

もうひとつの問題は、「論理」を求められると、ひとつの正解だけを探し求めようとしてしまう点です。

先ほどの質問（サッカーが好きな理由）に対する、各人のいろいろな答えは、もちろんすべてが正解です。それぞれに違いがあっても当然なのです。ところが、いまの学校教育は、基本的にひとつの正解を求めるようなシステムになっていて、質問が出されると、その問題に対する正解を探そうという態度になりがちです。こうした傾向は、理数系ばかりか、国語科や社会科学にも広がっているようです。

つまり、評価されるのは「答えが合っていたかどうか」だけなのです。他人のいろいろな意見を聞いたり、別な考え方を知ったり、議論をしたりという機会がとて少ない。答えはひとつしかないと思われている。問いを殆ど他人の答えと違う答えを言っただけなのではないか、と不安を持っている。間違っただけを言うのを恐れ、恥ずかしかる気持ちごとにも強い。現在の教育システムの中に、そんな雰囲気を感じるのです。答えはひとつしか許されない、という空気は、問題をさまざまな角度から論理的に考えていく豊かなプロセスを否定することにつながりほしくないでしょうか？

私たちは、これまでに見たことのないような創造的なプレーをする海外のサッカー選手に出会ったとき、大きな驚きと素晴らしい感動を感じてしまいました。そうした「クリエイティブ（創造力）」をどうやって育てていくか、というなら、失敗を重ねながら育てていくしかないのだらうと思います。世界的にレベルが高くて強いヨーロッパの選手たちは、子どもの頃、それも相当幼い頃から、草サッカーをしてきたのではないのでしょうか。草サッカーのよいところは、どんな失敗でも許される、という点です。失敗をたくさん積み重ねていく中から、「なぜ失敗したのか」「その原因は何か」「どこを変えていけばよいのか」といったことを考えるに違いがあります。

クリエイティブな能力は、幼い子どもどもの時にこそ、育つ。「答えはひとつとは限らない」という経験を、みんながトライしなくてはなりません。「自分なりに考えた」「私はああしたい」「あつ、これで失敗しちゃった」と、多くのさまざまな体験を通して学ぶ中から、クリエイティブな力が育ち、自己決定力が備わっていくのです。

出典

# 平成29年度入学試験 小論文「出題意図」

(入試情報公開用)

人間発達文化学類 スポーツ・芸術創造専攻  
推薦入試 I (スポーツ)

スポーツにおいて論理的思考を獲得する重要性について述べている文章を資料として提示する。この考え方に対し、賛成・反対のいずれにせよ自身の立場を明確にし、具体例を挙げながら個々の考えを論述させることで、理解力、論理的思考力、表現力を総合的に評価する。